

サーチライト With Pastor Jon 黙示録 第7章 パート1

このメッセージはアップルゲート クリスチャン フェローシップの、ジョン・コーソン牧師が公開したメッセージを、アメリカ在住の日本人クリスチャン木下言波が翻訳して YOUTUBE やブログに上げたものを文字化したものです。世界的なインターネット規制が始まろうとしています。私達はその日のために、文字にして紙に記録するのを感じました。また、インターネットに不慣れな方や字幕を追って読むのが困難な方のためにも必要があると主に迫られたと感じます。

※インターネットのメッセージを、文章化するこの働きを始めた姉妹が、現在目を患って治療中です。どうか、りょくさんの為にも、お祈りください。

「きょう、もし御声を聞くならば、あなたがたの心をかたくなにはならない。」ヘブル4:7

メッセージ by ジョン・コーソン牧師 アップルゲート クリスチャン フェローシップ

<http://joncourson.com/>

7590 Highway 238 Jacksonville, OR 97530

訳 by 木下言波 DivineUS : <https://www.youtube.com/user/TheDivineUs>

筆記 by Rin

前回の学びから患難時代へと突入しました。

患難時代は7年間で、教会の携挙が起こったらすぐに始まります。

携挙とは“取り去られること”

皆さんや私、本当に信じる人たちが天に上げられる事で、一旦私たちが携挙されると、この地上では大患難が始まります。

その時どれほど残虐に人々が殺されるかを見てきました。

それはそれは、残忍で血生臭く冷酷です。

「御怒りの大いなる日が来たのだ。だれがそれに耐えられよう。」(黙示録 6:17)

この部分を書き留めておいて下さい。

黙示録 6:16 では、小羊の怒りと認識されていますが、使徒パウロは、第1テサロニケ 5章で終末時代について書く中で、私たちにこう言いました。

神は、私たちが御怒りに会うようにお定めになったのではなく、主イエス・キリストにあって救いを得るようにお定めになったからです。(第1テサロニケ 5:9)

私たちに下されるべき御怒りは、もうありません。

それはイエス・キリストが、カルバリーの丘の十字架の上で受けて下さったから。

でも地上に残された人々は、イエス・キリストの御業を受け入れませんでした。

イエスが彼らのためにしたことを拒みました。

従って結果として、ここで神の御怒り、小羊の御怒りを受けるのです。

私たちは耐えられます。

キリストの中に立っていた私たちは、大患難が始まる時天国にいるからです。

私たちは天国で立っていますが、他にも立っている第2のグループがあります。

事実、4つのグループが6章・7章で登場しています。

1番目が私たち。

2番目は、この後、私は見た。四人の御使いが地の四隅に立って、(黙示録 7:1)

私たちはキリストがいる天国の中に立ち、地上では4人の御使いが大患難の中で立っています。

どこに？

四人の御使いが地の四隅に立って、(黙示録 7:1)

「ほ～ら！ だから聖書は文字通りに解釈できないんだ。地の四隅なんてないからね。」

ペンタゴン（アメリカ国防総省）に聞いてみて下さい。

アメリカ海軍が、何年か前に使った宣伝文句は「我々海軍は、地の四方に駐屯している。」

これは今でも使われている表現ですが、文字通りには受け取られていません。

それはともかくとして、これら御使いが地の四隅に立って、地の四方の風を堅く押さえ、地にも海にも
どんな木にも、吹きつけないようにしていた。(黙示録 7:1)

彼らは風を押さええていました。

聖書の表現では、風は神の裁きを表します。

エレミヤ書 51:6 や 49:36、その他色々な箇所、風が神の裁きであることが示されています。

続きを見てみましょう。

大患難が始まり封印が解かれると、突然静かになり、辺りが静まり返りました。

風が止められたのです。

そよ風すら吹くことがない静けさ、それは不気味なほどの静寂。

御使いたちが、世界中の風を押さええていました。

また私は見た。もうひとりの御使いが、生ける神の印を持って、日の出るほうから上って来た。彼は、地
をも海をもそこなう権威を与えられた四人の御使いたちに、大声で叫んで言った。(黙示録 7:2)

「私たちが神のしもべたちの額に印を押してしまうまで、地にも海にも木にも害を与えてはいけない。」

(黙示録 7:3)

私たちが神のしもべたちの額に印を押してしまうまで、裁きを押さえろ！

風を吹かせてはいけない！

裁きを下してはならない！

“しもべたち”が教会でないことは分かりますね。

なぜならイエスは教会に対して言いました。

「わたしはもはや、あなたがたをしもべとは呼びません。しもべは主人のすることを知らないからです。わたしはあなたがたを友と呼びました。」(ヨハネ 15:15)
だから教会ではあり得ません。

“しもべたち”を完全に理解しておくことは重要です。
これは驚きであり、現実的なことでもあるのです。
「わたしのしもべである彼らの額に印を押しなさい。」

それから私が、印を押された人々の数を聞くと、イスラエルの子孫のあらゆる部族の者が印を押されていて、十四万四千人であった。(黙示録 7:4)

この患難時代に、神によって、144,000人の神のしもべたちに印が押されるのです。
そしてなんと、14章1節を読むと、

また私は見た。見よ。小羊がシオンの山の上に立っていた。
また小羊とともに十四万四千人の人たちがいて (黙示録 14:1)

「143,999人!? ああっ!ひとり足りない!」とはならず、ここに書かれた一人ひとり、それぞれの額に印が押されます。

それが目に見えるのか、見えないのかは分かりません。

でも確かなのは、神にはその印が見えるということ。

また、御使いもそれを見ることができ、彼らを守るということ。

この144,000人は、大患難の時代に地上に立っている第3のグループです。

彼らは何者であるかは、ここにはっきりと書かれています。

イスラエルの子孫のあらゆる部族の者が印を押されていて、十四万四千人であった。
(黙示録 7:4)

ここで皆さん、よく注意して聞いて下さい。

このグループに関して、余りにも多くのデタラメや間違いがはびこっていて、多くの集団が、自分たちがこの144,000人だと主張しているのです。

エホバの証人も、自分たちがそうだと主張しました。

しかし、彼らは突然、それが合わないということに気がきます。

メンバー数が144,000人を超えてしまったから。

そこで彼らは法則を少し変え、メンバーの中の上位144,000人がそれだとしました。

過去にはモルモン教も、これは自分たちのことだと教えていました。

しかしながら彼らにも、メンバー数の方が上回るという、エホバの証人と同じ問題が発生し、教えを変える必要に迫られました。

非常に危険なカルト集団であるチルドレン・オブ・ゴッド。

今もアメリカだけでなく、ヨーロッパや東南アジアで拡大していて、自分たちがこの144,000人だと主張しています。

セブンスデー・アドベンチストも。

世界中の様々な集団が、今も、自分たちこそがそうであると教えているのです。

次から次へと色んなカルト集団が出て来ては、我こそが黙示録 7 章に登場する、神に選ばれ印を押された 144,000 人だと主張していますが、私に言わせれば、この教会のメンバーこそがそうだとすることは明らかです。

No ! No!! 冗談ですよ！

ここを読めば、誰の目にも明らかなようにはっきり書いてあります。

144,000 人は、セブンスデー・アドベンチストでも、チルドレン・オブ・ゴッドでも、モルモンでもエホバでもない。

イスラエルの子孫のあらゆる部族。

これが 144,000 人。

主は、これ以上分かり易い説明はないほどに明確にしています。

「144,000 人は、イスラエルの子孫のあらゆる部族だ。」と言った後、更にわざわざ時間を割いて、各部族を書き並べていきます。

ユダの部族で印を押された者が一万二千人、ルベンの部族で一万二千人、ガドの部族で一万二千人、
(黙示録 7:5)

アセルの部族で一万二千人、ナフタリの部族で一万二千人、マナセの部族で一万二千人、(黙示録 7:6)

シメオンの部族で一万二千人、レビの部族で一万二千人、イッサカルの部族で一万二千人、(黙示録 7:7)

ゼブルンの部族で一万二千人、ヨセフの部族で一万二千人、ベニヤミンの部族で一万二千人、(黙示録 7:8)

12,000 人づつが 12 回で、 $12,000 \text{ 人} \times 12 = 144,000 \text{ 人}$ 。

部族ごとに列挙されていますが、ここで注目して覚えていて欲しいことがあります。

旧約聖書で、ヤコブには 12 人の息子がおり、彼らが 12 部族になりました。

ただ一人、レビという名の息子、レビ族だけは、後に代々、天幕で祭司として仕えるため、土地が与えられていませんでした。

レビ族は自分たちの領域がなく、国中に散らばっていました。

またここに、“ヨセフの部族”とありますが、聞いたことがないと思いませんか。

ヨセフにはエフライムとマナセという二人の息子がいましたが、彼らはヤコブの息子となってヨセフの位置に入ったので、旧約聖書を読むとヨセフ族というのはなく、エフライム族とマナセ族があるのです。

ヨセフにはエフライム族とマナセ族の 2 部族がある。

つまり、イスラエルの 12 部族とは、実際には 13 部族が存在するという事です。

けれども常に 12 部族とするのは、レビ族が同じ部類では見られていなかったからです。

しかし驚くべきことに、ここにはレビ族の名前が加えられています。

レビ族が入り、マナセ族も記載されている。

ということは、8 節の“ヨセフの部族”はエフライム族です。

そうすると、誰かが外されたことになります。

それは、ダン族。

どうしてダン族が 144,000 人から外されているのでしょうか。

ラビ（ユダヤ教指導者）たちの教えにヒントがあります。

父ヤコブが息子たちを祝福する場面にさかのぼりますが、ダンの順番が来た時、ヤコブは何か不吉なことを言っているのです。

ダンは、道のかたわらの蛇、小道のほとりのまむしとなって、馬のかかとをかむ。

それゆえ、乗る者はうしろに落ちる。(創世記 49:17)

ラビたちはここを何度も強調して、“偽メシア”、私たちは『反キリスト』と呼びますが、「偽メシアはダン族から出る。」と教えています。

そのため多くの神学生が、反キリストはダン族から出ると信じていて、そうなる可能性も大でしょう。

しかし申命記 29 章を見ると、神は具体的に示しています。

偶像礼拝に陥った部族は、

主の怒りとねたみが、その者に対して燃え上がり (申命記 29:20)

その者をイスラエルの全部族からより分けて、わざわいを下される。(申命記 29:21)

偶像礼拝に陥る部族は、他の部族から分けられ、疎外され、切り離される。

それがまさに、ダン族に起こったのです。

ダン族は、約束の地に入った当初は、南の海岸沿いの領土を与えられましたが、それに満足しませんでした。

このことから学ぶべき人がたくさんいますね。

与えられた土地には敵がたくさんいたため、ダンの欲は更に増して、もっと楽に見える方、「北へ行こう」と言って、北部に移動し、ガリラヤ湖周辺に落ち着きました。

そこでダンとその部族は、異教の偶像にさらされるようになります。

彼らは偶像礼拝に陥り、金の子牛を造りました。

こうして、ダン族は除外されました。

まさしく、申命記 29 章 21 節の通りに。

ダンは、あまりにも異教徒のそばに住んでいたため、繰り返し偶像礼拝に陥ったのです。

イスラエルに行くと、今でも、ダン族が礼拝した金の子牛の祭壇の跡を見ることができます。

聞いて下さい。

彼らは異教徒に近づき、そして取り込まれてしまいました。

これを教訓にしましょう。

「ただ、ちょっと簡単な方を選ぶだけさ。」

これでは、ダンのように足元をすくわれます。

「除外」これが、この部族に起こったのです。

しかしグッドニュースは、ダン族は戻って来るということ。

主が再臨してイスラエル王国を創設すると、土地はイスラエル 12 部族に返されます。

それを最初に与えられるのは、ダン族。(エゼキエル書 48:1)

たとえこの場面で用いられなくても、です。

神の恵みとあわれみは、リストから外されたこの部族が、千年王国のリストに戻ることを許可されたということに表されていますね。

主が戻って来て王国を建て上げる時、ダン族は王国の一部となり、リストの最上位に位置されるのです。それが、神の恵み、あわれみ、そして赦しです。

イスラエルの 12 部族。

感激します。

さて今夜、私が一番伝えたい大切なこととお話しします。

カルトがこのことを主張するのには目的があるのです。

皆さんは、(黙示録) 6 章から 19 章までを読んで、144,000 人になりたいと思いますか。

大患難が襲ってくる時に、この地上に残りたいと思う人がいますか。

現実には起こっていることは、実に巧妙で本質的なことです。

それは、イスラエルを方程式から消し去ろうと、昔から繰り返し為されてきたことで、しかもそれはクリスチャンによって、またカルトによって行なわれてきたのです。

その言い分は、「神はユダヤ人を見放した。」

それはあり得ない！絶対に！

今も多くの人たちが、「神はユダヤ人を見捨てた」と教えています。

これは『置換神学』と呼ばれ、後で説明しますが、一般によく知られているのは「キリスト再建主義」や「神の国神学」。その思想は、

「ユダヤ人はイエス・キリストを拒絶した。

その時以来、神はもはやユダヤ人を通しては働かれず、ユダヤ人に対する神の計画も破棄された。

その結果、旧約聖書でユダヤ人に与えられたイスラエルへの約束や祝福の全ては剥奪され、教会に移された。」

よってこれは『置換神学』

「イスラエルは神の組織の中でその位置を失い、今は、教会がその立場を受け継いだ。

従って“我々”教会が、千年王国と呼ばれる王国をもたらすのだ。

と言っても、千年王国というのは、実際に千年間の平和と繁栄を意味するのではなく、ただの寓話である。

イスラエルに与えられた約束を彼らが失ったから、今ではこれらは霊的なもの、教会に関する寓話で、我々は今、王国が建てられるのを見ている。

我々が政治的に、社会的に、霊的に文化を立て直して、主が戻って来ることができるようにする。

その舞台設定は、我々にかかっている。

我々が文化を立て直し、我々が自分の役目を果たすことで王国をもたらす。

なぜなら、我々がイスラエルだから。」

一緒に考えてみましょう。

これらはどのように始まったのでしょうか。

イスラエルに与えられた、全ての約束や預言が寓話だとする考え方は、ずっと何世紀も前に起こりました。

これはサタンの策略で、黙示録 12 章にはっきり見ることができます。

そこでは、突然サタンが全ての勢力を送って、ユダヤ人とイスラエル国家に戦いを仕掛けます。

なぜ、どうして、サタンは、繰り返しユダヤ人を絶滅させようとし続けるのでしょうか。

それもクリスチアンの思考や教会を利用してまで、イスラエルの重要な立場を抹消しようとするのでしょうか。

それは、聖書全体に以下のことが書かれているからです。

彼ら（ユダヤ人）が自分の罪を認め、わたしの顔を慕い求めるまで、わたしはわたしの所に戻っていきましょう。（ホセア書 5:15）

この『罪』とはヘブル語では単数で、『自分の罪』とは『キリストの否定』のこと。

「ユダヤ人がわたしを拒絶したので、わたしは自分の場所に戻っていきましょう。」と主が言われたのです。

彼ら（ユダヤ人）が自分の罪を認め、わたしの顔を慕い求めるまで。

これは大患難の時、すなわち「ヤコブの苦難の時」（エレミヤ書 30 章）まで。

7 年の大患難の時、彼らは突然見るのです。

「ああ！イエスを拒絶したのは間違いだった!! イエスが我々のメシアだ！」

「彼らがそう気づいた時、わたしは戻る。」と主は言われました。

どうしてサタンがユダヤ人を抹殺しようとするのか分かりましたか。

ヒトラー、ヘロデ、ハマン、パロ、その他誰の手であれ、サタンは何としてもユダヤ人を抹消したいのです。

彼ら（ユダヤ人）が自分の罪を認め、わたしの顔を慕い求める“まで”、わたしはわたしの所に戻っていきましょう。（ホセア書 5:15）

イスラエルが存在しなければ、ユダヤ人がいなければ、サタンはキリストの再臨を妨げることができるのです。

つづく

兄弟たち。私はあなたがたに、ぜひこの奥義を知っていただきたい。

それは、あなたがたが自分で自分を賢いと思うことがないようにするためです。

その奥義とは、イスラエル人の一部がかたくなになったのは異邦人の完成のなる時までであり、こうして、イスラエルはみな救われる、ということです。

こう書かれている通りです。

「救う者がシオンから出て、ヤコブから不敬度を取り払う。

これこそ、彼らに与えたわたしの契約である。

それは、わたしが彼らの罪を取り除く時である。」（ローマ 11:25-27）